

ファイアーストームと生徒会

昭和31年卒 小合 洋一

ファイアーストームは旧制高等学校では盛んにやっていたようで、六高でも運動会、文化祭、記念祭などの行事の後には度々行っていた。この六高跡にきた我が朝日高校では昭和25年10月、初めてのファイアーストームが行われたと『写真で綴る百三拾年』に載っている。その後28年まで続いたようだが、29年は講堂が出来たばかりで中止。30年、生徒会発足と共に運動会を体育担当総務が主催することになった。原田親校長は来賓であった。運営については体育担当の光岡、古川、戸部先生らに指示を仰ぐ。運動会終了後ファイアーストームを実行すべくゴミを運動場中央に集めた。当時、岡山市には強風注意報・火災警報発令中。生徒課長の中田長安だったと記憶しているが、測候所に電話したら、こんな強風が吹き荒れている時に大焚き火をすることはまかり成らんといつている、即刻中止だ。伝令が本部に走る、「測候所に確かめろ！」返事は、風はそろそろ風いでくるとのこと。消防署に連絡し、安全奉行の指導に来てくださいと依頼。隊員が来るや、材料が大きすぎるので半分に分割し、ストームの周りに水を張ったバケツを2個ずつくると取り囲むこと。以上

の作業を3年G組が中心に各学年の部活の連中が手伝ってくれた。ようやく準備完了、点火式になった。子供の頃のキャンプファイアーを大型にしただけで、歌はあらかじめ書き出していたと思うが、「北進歌」「中学校歌」「朝日高校校歌」「でかんしょ節」など、リーダーが指導して騒いで廻った。火も小さくなり、用意の水をかけ消火活動が完了すると共に生徒課長に報告。最後に校内を各教室ごとに見回り、一人も残っていないことを報告し、仲間の待つ食堂で打ち上げをして解散した。

初代体育会担当総務としては体育の先生に指導を仰ぎながらも完遂出来たのだから成功であったと思っている。

その後の事であるが、31年は柔道部もつるさかった(強かった)ので先生の意見を押し切つてやったのではないかと思う。その後は江田五月君(昭和35年卒)によれば、良い所まではつめるのだが、いざ決行という時に、退学になつても良いという侍集団がいなかったと言う。みんなで渡れば怖くないという事を早く知っていたら、朝日高校伝統のファイアーストームになり、今に続いていかもしれなかった。初代総務として50年前の事を皆様にお知らせして良かったのだからと反省もこめて報告を終わります。

異聞

『ファイアーストーム事件』 進学と生徒会活動の狭間で

苦悩した生徒と先生

昭和34年卒 大田 英夫

入校後二度目の運動会を迎える昭和32年秋の事でした。その年も運動会後のファイアーストームは禁止された。火災危険を持つ近辺住民からの苦情に配慮するとの表向きの理由だが、真実は近辺の県庁官舎に居住する高位の職員や高校長会から「5%の自由出願(後で簡単に触れる)も認められその上ファイアーストームか。朝日高校のみの特権的我儘は不可」との圧力だったと云われる。このような裏面を知る由もなかったが、明晰な頭脳と純粋な鋭い直観力で学校側の禁止に不条理を感じ、禁止撤回に立ち上がった人々が当時3年生であった平田克二先輩(昭和33年卒)とその仲間だった。

当時朝日高校は、全国的に有名な進学校の伝統維持に腐心していた。自由出願へ向けての運動の甲斐あつて、昭和31年入校からの募集定員の5%以内において学区外からの応募が可能となった。朝日高校は「先祖(一中)がえり」と大きな期待を持ったのである。ただし有名な大学合格率の向上は、朝日高校のみの我儘ではなく、各都道府県が競い合っており岡山県自体

期待していたのも事実であった。そこでこの期待の生徒を核に優秀な生徒を育て、大学入試合格率を向上するために特別なカリキュラムが組まれた。入学直後の実力調査で能力別にクラス分けが行われ、さらに2年生からは女子だけのクラスが2組編成され、少数の成績優秀な女子のみが男子クラスに入れられた実質男女別学となった。この「進学一途」の学校方針には妙に納得させられる面と、常に何か違つてはいないかという懷疑が同居した。クラス間・生徒間に溝が出来、クラスの差についても不満が生じた。このような成績優秀者の優遇策に閉塞感を抱く一部の生徒には、学業を怠り放縦に任せる者もいた。中学校時代はおおらかに話が出来た女生徒とも3年間挨拶さえすることも無くすれ違つた。親しい友は出来ず、小・中学校時友情厚かつた友とも、「昨日の友は今日の敵」と疎遠になつた。そのような進学一途な学校で、蒙を啓き、喝を入れてくれたのが平田さん達の行動だった。

昭和32年の9月のある日、下校しようとして正門に行くと、いかつい3年生男子生徒が数名並んでいた。生徒総会をやるから講堂に行けとのことである。有名無実の生徒会は存在したが、自治会的な生徒総会などというものが朝日高校で出来るのかなと怪訝に思った。が、平田さん達は全校生徒を集め、学校当局の禁止理由は理不尽であり、納得できない。1年に一度ぐらい学業競争を忘れ「あつい」思い出を作ろうと熱弁をふるわれた。私はファイアーストームの復活提言よりも、高校時代は人格形成の時でもあるのだという悲痛な叫びと、それを凛々しく訴える情熱と勇氣に感動で震えた。進学一途の学校方針への不満やら疑問が、私も含め大勢の生徒に一気に噴出した瞬間だった。このように不条理に対して敢然と立ち向かう勇氣を持った人物に私もなりたいたいと思つたものだ。が、当時の生徒課長伊藤省吾(英語)先生に一蹴され禁止の撤回はならなかった。そんなことでこの年、ただでさえ白々しい後期の生徒会総務(会長とはいわず3名の総務によるチーム制)には、ばかばかしくて誰もなり手がなかった。しかしこれが後の昭和34年のファイアーストーム事件に繋がる。翌昭和33年前期の生徒会総務には、浅野聡明君が選出(指名?)され、学校当局との軋轢はなかった。事態は収束したかに思われた。が、次の昭和34年には熱血漢が指導者となり、激しいファイアーストーム復活運動が展開された。しかし学校側も譲れず、伊藤省吾先生の苦悩は日夜続く。双方激しく対立したまま、生徒課長は退職を、河原昭文君(昭和35年卒)は